

日本の教育の功罪

粕江みずほ 幼稚園事務長 秋 元 幸 生

はじめに

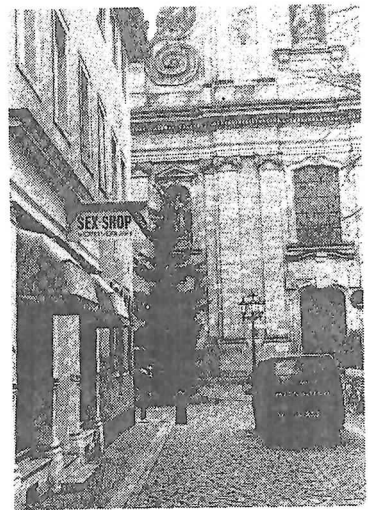
今回の欧州視察を通して、現在の日本の教育の功罪についていろいろ考えさせられた。ここでは教育以外の社会的要素も含めて、次の6つの側面から感じたことを述べてみたい。(1)時代や国境を超えた普遍的側面としての「真の教育とは何か」。専門家による多くの教育的論議はここでなされるものだろう。(2)「国民性と社会風土」。世界は1つの時代だが、伝統、風土、血族、国家などの要素が教育に及ぼす側面は考慮する必要がある。(3)「どのような日本人をこれから輩出しようとしているか」。これは展望、哲学を持った教育がなされているかということである。(4)「時代に沿う教育」。現代を生きる我々には、二千年の文化の上にさらに新しい英知を積み重ねる義務がある。(5)「家庭と教師の役割」。(6)以上をふまえた、よりよい教育の「実現方法」。

以下それぞれの側面について述べるが、理念的な話をするとは紙数の都合でまとめきれないので具体的な話を中心に述べる。

1. 「真の教育とは何か」の側面

真の教育が人間教育にあり、同時に文化の蓄積をふまえた独自性と知見を備えた人間を育成することにあるのは、多くの人は異論はないだろう。しかし日本の教育の現状をふりかえるとき、果たしてこのような点が意識的に、かつ体系的に、教育の現場に作用させられているという証しはあるだろうか。証しなど特別なくて、与えられた環境の中で個人なりに思考、苦悩、獲得していくべきものか。だとしたら教育という名の役割はあまりにも軽すぎる。みんなゲーテではないからだ。人間教育という点では、人間というものを幅広く論じ、思考する場をカリキュラムの中に持つぐらいにしても、教育として益はあっても損はしないはずだ。ただ昔の道徳のように威圧性があっては

ならないのであって、価値判断はあくまで個人に委ねられねばならない。また文化の蓄積の教育については、事実の記憶やパズルの解法に脳を酷使している児童・生徒を見ていると、言葉は悪いが将来消耗品という感じがする。「真の教育」という側面で私が強調したいこととして、“自然”という理念を教育の根底では流してもらいたいと思う。自然が営む摂理、驚異的に保たれている調和、このようなところに子供達の目が謙虚に向く教育であってほしい。ならば



パリ市街の風景

「真の教育」の半分は達成されとも思う。なぜなら自然は人為的にはかなわない根源的な教育者であり、多くの真理はそこにあるからだ。

2. 「国民性と社会風土」の側面

日本人は独創性がないとよく言われる。真似をして改善するのが上手な国民だと言われる。これは個人的には多分にそうだと思う。その原因を国民性に帰したくない（国民性に帰すと悲観的になるからだ）。確かに日本人には抑制の美德、平均化しようとする人間力学があり、これがサイエンスにおいて負要因として働くのは間違いない。真理の探求は常識を破るところにあるからだ。また大地に立って雄大に思考するという風土が無いので、ホームランではなくヒットを集めて姑息に嫁ぐという小判鮫商法が得意なところもある。これもサイエンスにおいては負要因だ。真理の壁はヒットでは届かないところにあるからだ。しかし原因の多くは歴史的なもの、今おかれている社会風土だと思う。日本は明治以来、急速に欧米の文化を追った。この追うパターンがしみついているのだ。これを脱するのは時間の問題だろう。ただ1つ気になるのは、ネタ捜しに躍起になる姿勢から脱却できるかだ。日本人はネタ（あるいは目的）が与えられるとそこに向かう集中力はすごい。集積度を上げなければならないというLSI、コンパクトにしなければならないという電子機器、燃費を上げなければならないという自動車などは日本の独壇場だ。問題はゼロの状態から目的を探し、そこへの道程のビジョンを描ける

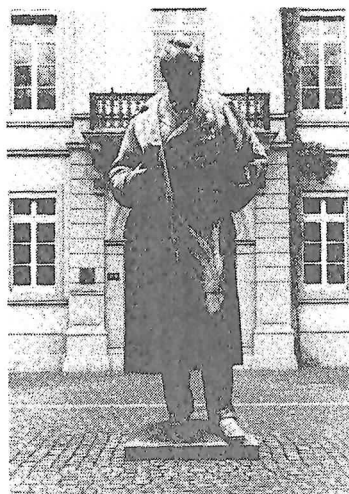
かだ。これができない限り日本は下請国を脱し得ない。児童生徒が直面している問題としては過度のパターン学習がある。適度なパターン学習は必要だが、過ぎると脳を硬直化させ斬新なものを異物として見るようになる。俗にいう頭が堅いだ。この元凶は今日の大学入試、学歴社会に行きつくが、これについては後で述べる。社会的には未知のものにチャレンジするための投資を企業はもっとしてほしい。目先の利益にとらわれず未知を切り開いて文化に寄与するというのは、先進国の責務だ。この分野で行政が税制面などで援助できることはあるだろう。またビジネス・チャンスの多い底辺の広い社会であってほしい。改善的ではなく革新的な発想は、一匹狼の精神が必要だからだ。

3. 「どのような日本人を輩出しようとしているか」の側面

この側面は指導要領などで行政が教育に介入する以上、無節操なものよりビジョンのあったものの方がいいという程度である。指導要領の精神は幼稚園から高校まで有機的に糸でつながっているか。日本はこれからどういう国家として立とうとしているのか。こういうことは我々みんなが問題意識をもっておいたほうがよい。ふと気がついたら戦争で兵隊に出ていたでは困るからだ。

4. 「時代に沿う教育」の側面

人間の脳は二千年の文化に比例して特別進歩したわけではない。アリスト



化学者ブンゼンの記念碑
(ハイデルベルグの人気教師)

テレスやプラトンを劣った人と思う人は誰もいまい。ならば文化に立脚した今の時代の教育がある。ここでは特に外国語教育を主張したい。言葉は相互理解の出発点だからだ。日本の学校英語は実用にならない。言語学としてやっているからしゃべれなくていいというのは詭弁だ。英語は小学校からやるべきだろう。もう1つは比較学を重視してもらいたい。文化、社会、言語、法律など多岐の分野にわたる比較学だ。世界を理解することは今や隣近所を理解するのと

同じ時代だからだ。

5. 「家庭と教師の役割」の側面

子供たちに対する親の愛情は第一に大事であるが、もう1つ、親は教育理念を持つべきだろう。「大らかに育てほしい」は言葉はきれいだが、悪く解釈すると安易な放任主義だ。どのように「大らかに育てほしい」という方法論を親は一応持つべきだ。教師においては子供たちとの間の心と心のコンタクトが張れているかだ。またカリキュラムの実践においては事実の伝達以上のことを情熱を持って教えていただきたい。教師である前に一個の人間として行動しなければ人間教育はできないからだ。親、教師いずれの場合においても、個人の尊重の精神で子供たちに接することは絶対に重要だ。

6. 「実現方法」

以上を有機的に踏まえた教育体系があってほしいが、ここでは1つ大学入試のことに言及したい。現在の教育を歪めているものがあるとしたら、その元凶は大学入試とそれにつながる学歴社会である。これが連鎖的にすべての下級教育に悪影響を及ぼしている。この部分はもはや改善より革命的変革が必要である。大学は高度の学問を自力主導で学んでいくところだから、必要なのは基礎学力だけでよい。高校卒業者の8割ぐらいの人が一度で合格するような大学入学資格試験を設けたら良い。この資格を持った人はどこの国公立大学でも面接と作文だけで、原則的に全員入学できるべきだ。私学は校風もあろうから少しはふるい落としでもいいだろう。大学で取得した単位は生涯有効とし、いつからでも卒業資格に満たない部分の単位の取得の再開を可能とする。卒業試験は難しくて良い。こうすることにより学士予備軍の人があらゆる年代にわたり、生涯教育を多いに動機づけるだろう。このようなゆとりのある教育体系がまず出発点だ。行政に多くを期待したい。